

【研究ノート】

中国の鏡像紹介

—浙江省蘇州・虎丘雲岩寺塔出土—

2006年に大和文華館で開催の特別展『鏡像の美—鏡に刻まれた仏の世界—』では、日本における鏡像の成立に中国の鏡像（中国では“線刻鏡”などと呼称）が深く関わっているのではないかと考察しました（拙稿「東アジアにおける鏡像—十世紀を中心に—」『展覧会図録所載』）。中国の鏡像作例はまだ少ないものの、その後、中国において新たな作例を数点実見する機会を得ました。その中から、蘇州で見た、制作年と出土地がはっきりしている1点を紹介し、考察を加えたいと思います。

図1、2は中国・江蘇省蘇州にある虎丘雲岩寺塔から発見された鏡像（蘇州博物館蔵）です。雲岩寺塔（図3）は五代末の後周顯徳六年（959年）から北宋・建隆二年（961年）にかけて建造されました。呉越国最後の王、銭弘俶の治世になります。雲岩寺塔は八角七層の樓閣式磚塔（総高約48m）で、現在までに元代・明代などの修復を経ています。塔の第三層からはさらに三面の鏡が発見されており（この三面は鏡面に線刻なし）、そのうち一面（素文鏡）の鏡背に墨書銘「女弟子陸

七娘敬捨大鏡一面

武丘山塔上
…建隆二年三月□日題」とあることから、銘文では「建隆」と刻まれているが、塔が竣工した建隆二年（961年）に納入されています。出土状況や、以下に述べますように、本鏡像の線刻や図像の表現が杭州・雷峰塔出土鏡像（997年頃）や台州・靈石寺塔出土鏡像（998年、拙稿「中国の鏡像について（浙江省・靈石寺塔出土鏡の背景）」『美のたより』no.155 大和文華館 2006年参照）と近似し同様の作風を有し、さらに靈石寺塔出土鏡像が塔の竣工に際して納入されている状況と同じです。これらとともに本鏡像は呉越国下で作られており、制作年代は前記二面よりさらに年代の早い建隆二年（961年）の塔への納入時と考えられます。現在のところ最も早い作例です。

本鏡像は鏡背が無文、直径16.2cmとやや小振りながらも、鏡面に非常に細い線で図像が刻まれています。鏡の上方に阿弥陀如来を、一際大きくあらわした阿弥陀三尊、両脇やや下方に供養菩薩、下部に小さく蓮蕾を持つ童子が配されています。童子の下には「僧廻捨

入塔」と不鮮明ですが施入者の名前を記すと見られる銘が刻まれています。刻線はニードル状の工具で引っ掻いたと見られ、日本・京都清凉寺蔵水月観音鏡像や靈石寺塔出土鏡像と共通します。緩やかな曲線を多用することで、尊像は鏡面に反射した光の中に揺めくように現れてきます。

鏡面中央の阿弥陀如来は右手を胸前、左手を腹前に置いてそれぞれ第3指を捻じる来迎印で、面長胴長の特徴のある様相であらわれます。左右上方の尊像は衣をまとい、化仏をつけた冠を頭上にのせ、主尊から見て右の勢至菩薩は右手に小さな水瓶、左手に花枝を持ち、左の観音菩薩にあたとみられる尊像は両手で花枝を持ちます。さらに下方の供養菩薩は右方が華盤を、左方が蓮台を持つと見られます。最下部の童子が持つ蓮華の蕾によって阿弥陀浄土への蓮華化生を示しているのでしょう。阿弥陀如来の頭上には散華が舞い、各尊像の衣には満遍なく文様が充填され、小さな鏡面に浮かび上がる世界は大変華やかです。各尊が坐す蓮華座は蓮肉に二重丸を充填し、蓮弁は幾本もの線で装飾的にあらわされており、向日葵のようにも見られますが、靈石寺塔出土鏡像にも類似した蓮華座が認められます。供養菩薩や童子のふくよかな面相、柔和な表情や全

体として図像に軽快な印象を与える刻線の軽やかさは、現在まで知られている数点の十世紀の鏡像に共通する要素です。

本作品によって、呉越国銭弘俶の時代（在位948～978年）に中国初期の鏡像が集中していることが改めて確認されました。阿弥陀如来をあらわすこの時期の鏡像は今のところ他例がありません。図像は多様で更に多くの作例の検討が必要ですが、線刻技法および作風はまとまっており、作例は未だ少数ながらも、中国における鏡像の特性がより明瞭になったといえます。

蘇州は多くの美しい庭園と水郷の町として有名ですが、本鏡像の所蔵先である蘇州博物館の新館（図4）は2006年に新しく開館しており、建物の設計者である貝聿銘（イオ・ミン・ペイ）氏は、フランス・ルーブル博物館のピラミッドや日本・MIHO MUSEUMの設計も行っています。蘇州には壁が白く屋根が濃い灰色（白牆黒瓦）の建築が多く統一感があり、大変落ち着いた印象を受けました。博物館の建築も白と黒を基調としており、概観は蘇州の雰囲気と溶け込みながら、一歩踏み入ると竹林や池などが配され、庭園の様相を含んだ明るく、広々とした空間が広がっていました。

（図1、2、3は蘇州博物館『虎丘雲岩寺塔、瑞光寺塔文物』文物出版社2006年10月より複写させていただきました。学芸部部員 瀧朝子）

図1 雲岩寺塔出土鏡（鏡面）

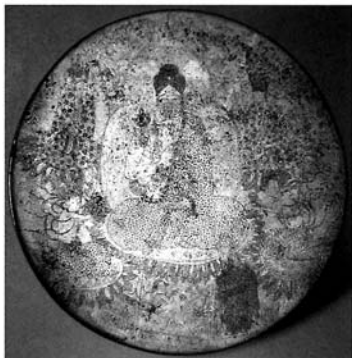


図2 部分図（供養菩薩）



図3 蘇州・虎丘雲岩寺塔



図4 蘇州博物館の入口

